令和７年度横浜ひなたやま支援学校　夏季公開講座③
<u>アセスメントから実践へ</u>
～太田ステージ評価を通して支援方法を考える～

たくさんの方にご参加いただきありがとうございました。
講座終了後のアンケートで寄せられたご質問について、
全国療育相談センター　立松英子氏からのご回答いただいていますので
ご紹介いたします。

（1）音声表出が難しい生徒で、文字を書くことが難しいとき、LPD-R5 の表出をどのように評価すればよろしいでしょうか。（特別支援学校教員）

（１）正しくは、LPD-R5 ではなく、LDT-R5（Language Decoding Test Revised 5：言語解読能力テスト改訂版の下位検査 5）です。LDT-R5 では、碁石を使って、「どっちが多い」と聞きます。これへの回答は、指さしでも可能です。黒５個と白５個を並べて「どっちが多い」と聞いた場合も、「同じ」という言葉が出なくても、両方指させばいいわけです。
しかし、現実にはこのような事態はあまり起こりません。なぜならば、LDT-R4 を通過した人は、定型発達で 4 歳水準以上の言語理解力があり、この状態で発語がないとしたら、言語理解以外の要因の影響を考えるのが妥当だからです。
また、太田ステージ評価の実施手順では、（LDT-R1，2，3 等シートの課題にのるお子さんであれば）LDT-R4 までは実施し、（複数の具体物を関係づけるかどうかで）StageⅢ-1 の前期後期を判断することになっていますが、LDT-R4 を通過しなかったお子さんについては、LDT-R5 を実施する必要はありません。

（2）発語の有無は、ステージには関係ないのでしょうか。（小学校教員）

全く関係ないわけではありません。定型発達では、StageⅠ-3 になると発語が出始め、StageⅡでは単語と反響言語の表出があることが一般的です。StageⅢ-1 になれば２語文程度のやりとりが可能でしょうし、StageⅣになれば双方向の日常会話が成立します。つまり、定型発達では、Stage の高次化に従って、発語が増えていきます。
一方で、障害がある場合、特に ASD を伴う場合は、しばしば言語理解と表出が乖離するだけでなく、単純な記憶や反復練習で獲得しやすい読み書き計算の方が Stage で表される言語操作能力よりも先に伸びていきます。年齢が高くなる程その乖離は広がるので、特別支援学校では、発語の有無と Stage がかけ離れることがしばしば生じます。実際、小学部段階でも、StageⅢ-1 後期（シンボル表象機能(言語操作)の水準は定型発達で２歳後半くらいに当たる）でも、特定の知識が豊富でよくおしゃべりする人は珍しくありません。だからこそ、その乖離を明らかにする太田ステージ評価を実施する意義があります。

（3）太田ステージをしっかり学習していきたいと思うのですが、教員が学べる機関はありますか？また、書籍やサイト等も教えてください。

（3）セミナー（基礎コース２日間）は、毎年８月に実施しています。毎年１月(来年は1/25)には東京都北区の「北とぴあ」で研究大会があります。詳しくは「太田ステージ研究会」のサイト（https://www.ohta-stage.org/）をご覧ください。

・原著は、講演のスライド資料の最後に記載があります。

【原著】太田昌孝・永井洋子・武藤直子編（2015）自閉症治療の到達点第２版 日本文化科学社

・立松の著書には必ず操作法や活用事例を載せています（発達支援と教材教具、発達支援と教材教具Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ ジアース教育新社）

・11月には「発達支援と教材教具Ⅴ」を出版します。お楽しみに＾＾。

次年度の夏季公開講座も多くの方々のご参加をお待ちしております。